

2011年10月号・季刊33号

ミンダナオの風

執筆編集*松居友 発行：ミンダナオ子ども図書館
連載特集：ミンダナオ子ども図書館流・平和構築の試み



今年のマノボデーは私にとって記念すべき日となったマノボ族の首領たちの推薦で私は正式に、マノボの酋長に任命された私の名は酋長アオコイ・マオンガゴン心から人を助ける我らの友と言った意味らしいこれで、ミンダナオのみならずフィリピンの先住民たちから敬意を表され身の安全も守られるのだというちなみに、妻のエープリルリンはマンダヤ族の血を引いている

ミンダナオで最も不幸な境遇に追い詰められているのは、マノボ族やマンダヤ族といった、先住民たちだろう。意図的に繰り返される山岳地帯での戦闘で、絶えず難民化したあげくに、帰ってみると畑地は荒れて、現金もないので作物の種も買えない。

そこに付け入る金持ちたち。時には、海外のフロンティアション企業などとながっていて、あっという間に先住民の自給地を、考えられない低価格で買収していく。米国の西部劇そのものだ。

難民生活が繰り返された結果。現金もなく、日々三食食べられず、子どもを養いきれない先住民の家族たちは、生まれ故郷を捨てて物乞いをしに、町へと出て行くしか手立てはない。そのため、提出されたわずかなお金で、土地を手放してしまうのだ。

これに抵抗するためには、先住民の人たちに収入が入るプロジェクトを始めなければならぬ。長年考えてきたが、いよいよ来年あたりから二つのプランを開始する。

1. ゴムの木とバナナの混成植樹
 2. 映像音楽出版文化プロジェクト
- 豊かな土壌での農業と、先住民の感動的な伝統文化にこそ、彼等の未来が見えてくる。となたか、制作スタジオ建設をお願いできませんか？



ミンダナオ子ども図書館が、日本政府ODA『草の根無償』で建設した、ブアランの小学校

ブアランの小学校が完成した 平和構築の試み(3)

平和を構築する試みの一環として、ミンダナオ子ども図書館が、日本政府ODA『草の根無償』で建設した、ブアランの小学校が完成した。

完成した8月半ば、完成祝いを兼ねて、学校の前で『平和の祈り』の集いを、村人と全校の生徒たち、MCLで建てた保育園の子どもたちも呼んで開催した。

当日は、外務省からIMT国際停戦監視団に派遣されている落合氏も出席、仏教徒の立場も加えてスピーチをされた。日本からは、小倉カトリック



ニューバレンシアのイスラム教徒の子どもたち

教会の山元真神父とMCLジャパンのメンバー、そして式典の最後に、立正佼成会から贈られた『ゆめポッケ』を全部の子どもたちに手渡した。ゆめポッケとは、子どもたちが一日一食を抜いて、そのお金で戦禍に見舞われてきた貧しい地域の子どものために、オモチャや学用品を届ける、立正佼成会の長年のプロジェクトだ。

『平和の祈り』は、ミンダナオ子ども図書館の子どもたちの踊りから始まった。その後、イスラム、先住民、クリスチャンの祈りに続いて、マノボ族の踊りも披露された。私は先日、MCLの文化祭マノボデーで、マノボ



酋長として踊りに加わる

日々の活動を、豊富な写真で、月に2回から3回の割合で更新報告しているMCLのウェブサイト検索『ミンダナオ子ども図書館』、必見です！²

首領たちから、正式にマノボの酋長としての儀礼を受けたので、酋長として踊りに参加した。私の名前は、酋長アオコイ・マオンガゴン。

開校式における平和の祈りは、国際停戦監視団の機関誌にも掲載された。

それだけではなく、平和構築の成功例として、フィリピン駐在日本大使もあちらこちらで触れられている、という話が伝わってくる。

そのせいかどうかはわからないが、先日は、国連の国連難民高等弁務官事務所から、今井飛鳥さんもMCLを訪れて、おもに先住民地域の現状について



スカラーによる祈りの踊り



ゆめポツケを渡した

て情報を交わすことになった。8月に入って、先住民地域にも、国軍が投入されてNPAと衝突し、マノボ族たちが避難民化しているからだ。

しかし、何よりもブアランに建設した学校は、日本国民の税金で建てられたのだし、日本の皆さんのおかげで、平和構築への貢献が、ミンダナオ子ども図書館としても出来たわけで、その点から鑑みても、現地の人々、特に戦禍の中で苦勞してきた子どもたちに代わって、心から皆さんにお礼を言いたい。日本の皆さん、いつでもいらして下さい。私たちが、ご案内します！

ブアランは、長い年月、最も戦禍に見舞われてきたピキットのイスラム地域だ。

この地域が、いかに不幸な戦闘の歴史を担っているかを理解するためには、この小学校が、開校12年目にしてようやく、初めての卒業生を出したことからも理解できよう。それも、何

と去年の事。と言う事は、開校以来、半分以上は授業が無く、子どもたちは避難民状態に置かれていたわけだ。1970年頃から開始され、2000年、2003年には、アメリカ軍も交えたテロリスト掃討作戦が展開。空爆も含む大きな戦闘があり、その時の難民キャンプの悲惨な状況を見て、MCLの活動を始めたことは以前も触れたが、その後も戦闘は散発的に起こり、2008年9年にも、ブアランの子どもたちは避難民化している。

MCLにとって、戦禍の激しいブアランは重点地域の一つでもあり、戦闘で親が亡くなった子どもも多く、そうした子を中心に他所よりもスカラシップ学生を採って来たが、さらに高橋毅氏の



寄贈による保育所を建設、その後も子どもたちが難民状態になるたびに、ピニールシートや炊き出し支援、医療支援や心の傷トラウマを癒すための読み語りも続けてきた。

もう5年越しのお付き合いであるだけに、当時、幼かった子たちが今は高校生になったりして、さらに大学を目指してスカラシップを続けていく姿を見るのは、本当に我が子を見るようなうれしさだ。

この小学校は、2000年の爆撃で建物の壁に穴が空き、私たちが初めて行った2006年頃でも、子どもたちは、壁に砲弾の穴が空いたままの教室で勉強をしていた。

しかも、支柱の鉄骨はさびびて、いつ崩れるかもしれない教室で・・・。

その頃から、地域の要望もあり、学校を建設したいと思ったが、MCLのような小さなNGOでは、自己資金では保育所建設がやっとで、とても学校は無理だと思った。その時、耳にしたのが、日本政府の主催する『草の根無償』プロジェクトだった。

最初に応募した場所は、反政府勢力の拠点と言われたマカブアル村で、こちらは今は、村へ入る道も出来て、最初200名だった生徒が400名にま

郵便振替口座番号 00100 0 18057
加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』
自由寄付で結構です。よろしくお願ひします。

で増え、離散していた家族も集落に戻り、新たに家も建ってきている。人々の顔も明るくなり、集落も平和で隔世の感がある。

ブアランではなく、マカブアル村を最初に応募した理由は、ブアランは戦闘が頻発して危険すぎたからだ。両村の小学校建設の経験から言えることは、学校のような教育施設の建設支援が、地域の平和、とりわけ地域の人々の心に、いかに大きな影響を与えるかという事。

直接収益に結びつくようなプロジェクトも重要だが、地域の有力者に偏った効果を及ぼしたり、場合によっては、地域の貧困格差を助長する結果になったりもする。それに比べると、教育支



丘の上のニューバレンシアのイスラムの子たち

援は、万民に未来への希望を持たせてくれる。子どもこそ未来だからだ。

驚いたことにブアランの学校は、何と3ヶ月あまりで完成した。

4月から建設を開始して、予定では10月の完成だったから奇跡のようだが、何故こんなに早く完成したかという点、8月からイスラム教徒にとつては神聖な断食月、ラマダンに入るの、その前に仕事を終えたかった、という理由もあるようだが、今まで30年も敵対し交流を断っていた下のイスラム教徒と丘の上のクリスチャンの親たちが、30年の敵対関係を断ち切って、お互いに協力して村を挙げて総出で、子どもたちが通う小学校を建設した事が大きい。

建設現場を訪れてみると、イスラム教徒とクリスチャン、両方の親たちが大勢、笑顔で学校を建設しているではないか。父親だけではなく、母親たちも炊き出しに参加している姿は、見ていて涙ぐみそうになるような、不思議な感動があった。

ここまで互いが協力し合えるに至る経過は、決して簡単だったわけではない。また、学校が建ったからと言って、その後、平和が保障されたわけでもないが、少なくとも村人も子どもたちも、

やはり平和は良いなあと、心底感じていることが、表情からも見て取れた。

ここで簡単にこの村との関係を振り返ると、2003年の戦闘の後、2006年頃から、MCLは下のイスラムの村とつきあい始めた。

まずは、下のイスラムの村からスカラシップの子どもたちを採用し、村との長いお付き合いを開始。MCLのスカラシップは、大学卒業まで続けることが基本だから、10数年のお付き合いがここから始まる。

2ヶ月に一回、学用品を届けたりと、村に繰り返し通っていけば、何に困窮しているかは、言わずと見えてくるし、「保育所を経由しないと小学校に上がれない」と言うフィリピン政府の施策を受けて村に保育所も建てた。

だがその頃は、丘の上にクリスチャンの集落があるとは知らなかった。イスラムの村人たちは、あえてその事を



クリスチャンの集落長とイスラムの村長

口にすることも控えていたのだろう。何かを怖がっていたことはわかったが、そこにクリスチャンの小さな集落が有って、うかつに入れば殺される、と言うことがわかったのは、学校建設の要請を日本政府にあげた後のことだ。

「クリスチャン集落にも保育所を建てられないだろうか」ピキット市のD SWD(福祉局)の所長補佐で、MCLのボードメンバーでもあるグレイスさんから要請を受けて、私たちは、初めて丘の上のクリスチャン集落を調査した。そこは、全員が民兵で構成されている小さな集落だった。かつては、300世帯ほどあった家族が、20世帯ぐらいに減っていた。周囲を竹垣で囲い、塹壕を掘り、丘の上をかるうじで死守していると言った様相だ。

「イスラム教徒は絶対に入れない」と言う掟があり、下のイスラム教徒と30年に渡り対立してきたという。

昔は、両集落を結ぶ道があり、若者たちは、共にバスケットボールをして遊んだそうだが、繰り返される戦闘の結果、交友は途絶え、道は消え、お互いに怖れつつ生活をしているのだ。

MCLではこの地にも、多湖さん一家の寄贈による保育所を建設すること

を約束し、日本からちょうど来られていた山元眞神父とピキットのOMIの神父と共同でミサをたてた。その集落の人々は、皆、カトリック教徒だったのだ。

奇跡は、保育所の開所式に起こった。事前の打ち合わせもほとんど無く、私たちは、怖れて嫌がるイスラム教徒の村長を説得し、イスラムの村の母親や子どもたちを車に乗せて、前置き無しにクリスチャンの村を訪れた。

本来だったら怖れて同行などしなかったであろうイスラムの村の母親や子どもたちが、喜んで同行してくれたのは、クリスチャンの村で絵本の読み語りがあると、聞いたからだろう。すでに下のイスラムの村では、何度も読み語りをしてきたし、子どもたちも私にとっては、我が子のような奨学生



イスラムの村長とクリスチャンの集落長が握手した



MCLの奨学生

だったから楽しみについてきたのだ。仲直りしたいという思いもこめて。

クリスチャン集落の人々も、思わぬ訪問者にあっけにとられながらもイスラム教徒を受け入れて、皆で読み語りを楽しんだ。30年間、イスラム教徒を入れなかった村だが、読み語りにもMCLのイスラム教徒の子たちが参加していたし・・・

その後、開所式の時、保育所内で、30年間対立していたイスラム教徒の村長とクリスチャン集落の指揮官が握手したのだ！

これは、驚くべき出来事だった。ここで、平和構築のキーワードを挙



MCLの奨学生

げるとしたら「子ども」だろう。子どもたちへの愛。それは、民族や宗教を超越している。子どもたちが幸せに生きられる世界には、「平和」が欠かせない。また、子どもたちには、将来の夢を実現するためにも、「良い教育を受ける機会」を与えてあげたい。そのためには、保育園や学校と言った建物の存在も不可欠になってくる。

その後、学校建設が決まると、私は、これは両集落を結ぶ絶好のチャンスだと感じた。何よりも、丘上のクリスチャン集落の子が、下のイスラム教徒の村に建つ学校に通えるようにしなければならぬ。そのためには、かつてあったという両集落を結ぶ道を、復活させなければならない。

最初にこの件を、知り合いのピキット市長に提案したが、機材は貸せるが村道ではないので行政としては経費を負担することは難しい、という話だった。ただし、村人たちが独自に道を切り開くのなら、食事は提供しても良い、とのこと。

そこでこの件を、懇意のイスラム側の村長に話した。すでに学校建設は決まっていたのだが、「両村を結ぶ道を作るのが建設の条件だ」と、大風呂敷を広げると、新村長はなかなか理解のある人で、労働者の食事が保障される

のなら、すぐにも始めよう、と快く了解してくれた。また、クリスチャン集落の新役員も、心から賛成してくれた。

こうして両村を結ぶ道は、30年の歳月を経て雑草と灌木で覆い隠されていたのだが、イスラムとクリスチャン両集落の親たちに、MCLの奨学生や若者たちも参加して、3日で道が開拓された。私も参加した。こうして、二つの集落がつながったのだ！

その後、丘の上で、イスラムの人々とクリスチャンの人々が仲良く住むための確認と保障を兼ねて、ピキット市や国軍も交えて、平和構築会議を現地で開き、互いに異なる宗教や習慣を認め合い尊重しながら暮らすための話し



電話番号 : 080-5502-3446 (日本から現地直通)
09219603634(現地携帯)

FAX 専用 : (001)010-63-64288-5426(現地)

メール : mclstaff@zar.att.ne.jp(松居友)



平和の祈りを一緒に唱える、MCLの奨学生たち



合いをした。

そうした会合の前後には、必ずMCLの子どもたちによる読み聞かせのアトラクションも実行して、大人だけではなく、子どもたちとも楽しんだ。MCLでは、イスラム教徒もキリスト教徒も先住民も、皆仲良く助け合って生きているので、読み語りのイベントを通して、そうした雰囲気も自然と現地の子どもたちや親たちにも伝わっていくのだ。

そうした経過の後、学校建設が開始され。親たちの協働で、何と3ヶ月で完成したのだ。

2008年も、ミンダナオの戦闘が

最初に発火した地点はここだった。下のイスラム地域と、丘の上のクリスチャン。戦闘は一見、小さな地域での宗教対立から生じたように見えるのだが、そうではない。

小規模な戦闘や小競り合いなら考えられるが、大規模な戦争や戦闘には、必ず 外部のさらに大きな第三の力が関与している。その力は表に姿を現さないが、こうした第三の力が、対立を利用して戦争を引き起こしているように見えてならない。

繰り返しになるかもしれないが、大規模な戦闘というものは、地域争い(例

えばこの地のイスラム教徒とキリスト

教徒との対立等と言った原因)からミンダナオ全域に拡大するのではない。もちろんリドーとこちらでは呼ばれる、地域権力者同士の対立から戦闘が起ころうとはままたあるのだが、それが

ミンダナオ全域に広範囲に拡大するためには、反政府軍を挑発し、国軍の参戦を可能に促す必要がある。そのためにも、両者が参戦できるような対立を煽る「火種」を作らなければならない。私が現地で見える限り、こうした火種

には誘拐や爆弾事件も含まれており、新聞やテレビと言ったマスコミで、時には真実が歪んだ形でさらに煽られ、意図的に拡大されていく。

戦争は偶然勃発するのではなく、計画がすでに事前に存在していて、それに合わせて火付けされ、煙が出たときには、すでに軍が配置されている、といった筋書きなのだ。

現地で火種を作るのは、かなりプロフェッショナルな集団で、「集落や宗教の対立」等とマスコミなどで報道される裏で、テロリスト集団、暗殺集団のようなものが関わっている事が多々あり、意外とそれが、国際的な経済的支援を背後に持っていたりする可能性もあるのだからやこしい。

そこまで行くと、ピキットを聞き

グアサン湿原に眠る石油と、石油開発

をめぐる国際的な資本との関係も想像圏内に入ってくる。こうしたことが、この地にいると、自然に見えてくる事柄なのだが、たいして面白いことでもないのだからこの辺にしておこう。

学校建設の完成と開校式を兼ねて、MCLでは、独自に平和の祈りを開催したが、それでブアランに平和が訪れたとは思っていない。これを書いていく時すでに、現地では、海外から派遣されたテロリストグループや離脱派反政府組織、軍も含めてMILFも動き始めている。ニューバレンシアの奨学生の子たちは、イスラム教徒もキリスト教徒も、状況を怖れて一週間学校を停止・・・平和構築の試みは続く。

平和構築は、息の長い仕事なのだ。



学校の壁に描かれた文に見入る子どもたち

郵便振替口座番号 00100 0 18057
 加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』
 自由寄付で結構です。よろしくお願ひします。

今後の新たな展開に向けて

松居陽、松居友

イスラム地域の平和構築の障害は、リグアサン湿原に眠る石油と天然ガス資源をめぐる国際的な資本と政治の暗闘という部分で、南シナ海の諸問題と似ているように思えるが、一方で山岳のマノボ地域の戦闘の問題も、国際資本におけるプランテーション、(バナナだけではなく、オイルパームやジェトロファを含む)、山岳地の希少金属、に関連した土地所有の問題とつながっている。

この事は、次回の季刊誌で書きたいが、貧困によって安価に土地を手放さざるを得ないマノボ族等の先住民たち、それに抵抗するNPA。国軍とNPAの狭間で小規模の戦闘が繰り返されて、避難民化を繰り返したあげく、結果的に集落を捨てざるを得なくなり、移民系の地域有力者に自給地を明けわたしていかざるをえない先住民たち。

その実情を見るに付けて、それが、私たちにとっては我が子同然のMCLの子たちや奨学生たちの地域であるがゆえに、いよいよMCLでも何らかの対策を講じなければならないと言う想いが強くなってきました。

結論から言えば、自給地を手放さなくても良くなるには、小規模でも良いので、生活していけるだけの収入を確保する必要があります。

ミンダナオの豊かな文化(先住民を含む伝統文化と芸術家としての感性と創造力)それと自然(肥沃な土壌)を考えると、収入をもたらす仕事は、文化部門と農業部門。

農業部門は、洪水対策も兼ねて、ゴムの木とバナナの混成植林を実施し始めます。

しかし、音楽や映像部門の才能の無い私には、難しかったのが文化部門。幸いに、息子の陽がMCLに参加し、文化部門を立ち上げたいという意向を語ってくれました。

音楽に関しては、学生ホルンの大会でマサチューセッツ州「2位、小澤征爾の指揮で演奏。その後、クラシックに飽きたらずニューヨークでジャズと舞台映像を学んでいますし、ニューヨークの舞台芸術専門学校を出て、コンピュータを駆使した作曲や映像編集、演出や創作もプロ並みです。

彼の経験から、文化部門立ち上げにどうしても必要なのが、若者たちの創造の場としての小スタジオの建設。

本人の書いた言葉ですが、ちよっと耳を傾けてあげて下さい。(友)

はじめまして、ミンダナオ子ども図書館の松居陽と申します。いつもご支援して下さい、どうもありがとうございます。

ミンダナオの時間は、止まったままです。そこには、爆発的な命が生きています。ミンダナオの若者たちは表現することを惜しまず、その多くは経験から見事な音楽家や舞踏家などに育っています。

しかし、貧困率が高すぎるためか、芸術家が活躍する機会が欠けています。MCLの奨学生の中にも、音楽や美術などを追求したくても大学に専攻がない、コミュニティから支持がないなどと、夢を持つことすらためらってしまう子がほとんどです。

僕は、若いころから音楽を追求して来ましたが、ここで出会った若者たち、特にその数人の技術は、その年齢を超えて驚くべきものであり、またそれを生んだ情熱は、言葉にならない熱いを持っていきます。一人ひとりの感性、そしてミンダナオ特有の文化が、面白い現象を生み出しています。

僕の願いは、彼らの活躍する場を作り、そこから世界へ向けて、ミンダナオの命を表出していくことです。そのため、ミンダナオ子ども図書館では、スタジオを作りたいと思っています。

スタジオといっても小型で、防音室や録音機材など、機能するために最低限必要なものをそろえる所から始めつもりです。

スタジオの使い道は多く、カルチャープロジェクトが本格化する今、マノボ族などの伝統文化を保存し、発信する、ドキュメンタリー映画の作成に当たって、音声を録音など、必要性が高まっています。

スタジオは、80万円で建設可能。よろしくお願いします。(陽)

スタジオとは、密閉したコンクリートの建物で、中をフォームで覆った空間のこと。部屋の中には、録音用の機材と共に、作曲や映像編集用のコンピュータが置かれている。松居陽は、ホルンやシンセサイザーの演奏だけではなく、アメリカの大学ではシンフォニーも作曲、公演。ジャズにაცოგაれニューヨークへ、専門学校で映画の編集制作を学ぶ。MCLの奨学生には、音楽教育専攻で作曲も歌も天才的な子たちも居て、彼等の作品をCDで発表したり、ドキュメンタリー映画も来年には完成します。

振替用紙通信欄に「スタジオ」と書いて振り込んでいただければ幸いです。(一部でも可能)お願いします。

郵便振替口座番号 00100 0 18057
加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、
一日三食たべられないときと、
お金が無くて学校に行けないとき
病気になっても病院に行けないとき・・・



ミンダナオ子ども図書館支援方法

- 1、医療や読み聞かせ活動を支援して下さる方々へ・・・自由寄付**
直接下記の振替口座をお願いします。年四回、5月、8月、10月、3月に季刊誌「ミンダナオの風」をお送りしています。
- 2、大学生高校生スカラシップ支援の方へ・・・年額60000円（月額5000円）**
振り込み用紙の通信欄に「スカラシップ」と書いて、一部振り込んでいただければ、年四回の季刊誌と本人からの手紙、8月プロフィール、10月ソーシャルケーススタディ、3月スナップ写真、5月成績表などが届きます。
文通やプレゼントも可能です。訪問の際は、自宅にご案内します。
- 3、里親支援（小学生）・・・年額30000円（月額2500円）**
振り込み用紙の通信欄に「里親」と書いて、一部振り込んでいただければ、年四回季刊誌と8月プロフィール、10月、3月に絵手紙とスナップ写真、5月機関誌が届きます。
文通やプレゼントも可能ですが、隔月の学用品と一緒に私たちが届けて返事をもらうため返事は機関誌に同封する形で半年ほど後になる可能性があります。
訪問の際は、自宅にご案内します。
- 4、保育所建設支援・・・30万円（一括振込みでお願いします）**
振り込み用紙の通信欄に「保育所建設」と書いて振り込んでいただければ、年四回季刊誌と10月には毎年現地の保育所のスナップ写真。開所式参加や訪問も可能です。
- 5、古着等の物資支援：郵送およびフィリピン宅配フォーレックスが便利です。**

詳しくはウェブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館」

郵便振替口座番号 00100 0 18057
加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』

スカラシップ・里親に関する質問、または現地訪問その他に関する問合せは、
電話・FAXかメールで現地にご連絡いただければ幸いです。

日本事務局は、完全ボランティアのためFAXのみ受け付けています。

電話番号：080-5502-3446（日本から現地直通）

09219603634(現地携帯)

FAX専用：(001)010-63-64288-5426(現地)

メール：mclstaff@zar.att.ne.jp(松居友)

日本事務局；Fax専用 093-581-1150（内容は本部に転送されます）
現地住所：Mindanao Children's Library：Brgy. Manongol Kidapawan City Cotabato
9400 Philippines